

# 学校教育課だより

# かけはし



学校教育課だより  
「かけはし」  
【第 8 号】  
平成 29 年  
12 月 21 日発行  
御殿場市教育委員会  
学校教育課

## 雪国

教育部長 杉本 哲哉



先日、運転中にラジオを聴いていたら、面白い話がありましたので、ご紹介します。

川端康成の小説「雪国」の書き出しに「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」という有名な一節があります。

これの英訳は、The train came out of the long tunnel into the snow country. となります。

私たち日本人は、この短い一節から自分が汽車の乗客でトンネルから出て窓から見える雪景色をイメージします。

しかし、英訳になると、汽

車の主語となることで、パードビュリックに空から見た情景汽車がトンネルから出てくるように表現されてしまいます。

この翻訳者は、サイデンス テッカー教授です。教授は湯島に住むほどの日本びいきでしたが、その教授をしても、

日本語に込められた微妙なニュアンスを英語に翻訳することとは、大変難しかったのかなと想像します。

確かに原文には自分が汽車に乗っているとは書いてありません。それ故に日本語の含蓄とともに日本人の想像力、洞察力は素晴らしいものだと

## 教師力向上講座「架け橋」 第三回・第四回報告

第三回教師力向上講座「架け橋」は、静東教育事務所地域支援課 伊藤賢一指導主事による講義・演習でした。内容は「外国語活動・外国語の授業づくりと今後の動向」です。

講義では、外国語活動と外国語の目標や観点を小学校中・高学年から中学校までを並べて、違いを明確化したり、学習指導要領上の言葉のとらえを丁寧に指導したりしてくださいました。また、授業づくりの視点として、Start Talk の例や終末コミュニケーションを軸とした単元構想づくりの重要性を教えてくださいました。

ある参加者の感想を紹介いたします。英語を話すことも書くことも苦手であり外国語活動がこれから入ってくることはとても不安です。(中略)でも簡単なものや文字をできるだけ書かない方がよいと聞いて少し安心しました。「自分にはできない」という思いは子どもにも伝わり、英語の楽しさや面白さを伝えることはでき

ないと思うので、まずは自身自身が英語に慣れ親しみ、楽しむことが大切だと思います。

今回講座の参加者は、きつと今後の自分をとらえ直し、子どもと一緒に楽しみながら授業をつくっていくのではないのでしょうか。



第四回教師力向上講座「架け橋」では、玉穂小学校 平松祐主幹教諭による講義・演習を行いました。内容は「子どもにとって切実な課題をつくるためのヒント」です。

講義では、魅力ある授業をつくるためには「子どもをとらえること」が最も重要であること、その実態に応じて「学習内容」や「学習方法」を選定することが大切であること

を指導してくださいました。また、世に知られている「学びの共同体」や「知識構成型ジグソー」等の指導方法を整理して、紹介してくださいました。そして、道徳の実践例をもとに、授業づくりに取り組む過程を教えてくださいました。

平松先生の講話を聞いてハツと気付かされることが多々ありました。「もうやって授業を積み重ねていくときっと素敵なクラスになるんだろっな。」と切実に感じました。先生が紹介してくださった「赤ちゃんポスト」、命の重みについて考え始めた私のクラスでも実践させていただきます。

これは、ある参加者の感想です。平松先生の言葉のおり授業は鍋と同じです。今回の参加者は、今後、自分の学級の「だし」を取り、良い「食材」と「道具」を探しながら、独自の味付けを行っていくことと思えます。

【指導主事 丹澤謹志】



### 子どもたち、

### 目が点でした

声がかすれて、出なくなり  
ました

十月二十一日・二十二日と、御殿場で「おじいさんたち」のバレーボールの大会があり、わたしも出ました。六十代 B トーナメント準決勝！勝てる相手だ！元気で負けるな！とばかり声を出しました。しかし、試合はフルセットで逆転負けでした。月曜日になったら、声が出なくなっていました。

その日は玉穂幼稚園の訪問でした。発声ができないので、これから年をとってそうなたときの気持ちに分かりました。子どもたちはこんなわた

しの様子を見て、本当に困ったような顔をして心配してくれて、そこでまた、十歳くらい年をとったような気がしました。

翌日、少し声が出てきました

その翌日は原里西幼稚園でした。

「こ・え・が・あ・ま・り・で・ま・せ・ん」

というと、またまた心配顔で見えていました。子どもって優しいですね。

「ごっこ遊びをしているコーナーで二・三人の子どもが、

「だいじょうぶ？」「かぜひいたの？」

と聞いてくれました。わたしは、かすれ声をやっと出して

「も・り・し・ん・い・ち・で・す」

と、ふざけて言いました。

次の瞬間、子どもたちの目は点になり、場は凍り付いて、

気まずい雰囲気になりました。

（はい、ごめんなさい。心配してくれたのにね。わたしが悪うございました。）

心で謝りながら隣の部屋に向かいました。

めげずに繰り返しました  
隣の部屋では読み聞かせを

していました。先生の前に集まって集中しています。お話が終わって、先生が、

「あっ、立雄先生が来てくれました。朝のご挨拶をしましょう」

「おはようございます！」

という流れになり、よせばいいのにまた、わたしが言ってしまうました。

「も・り・し・ん・い・ち・で・す」

すると、担任と補助の先生が大爆笑されました。子どもたちはというと、これがすごい！と思いました。

子どもたちは一瞬、理解できず、先生の笑い顔を見て、次に大笑いしたのです。

この二瞬の出来事で、先生と子どもたちの信頼関係が見えました

（子どもたちにとって理解できない出来事）↓（先生、どうなってるの）↓（あっ、先生が楽しそうに笑ってる）

↓（ほくらにはわからないけど面白いことなんだ）↓（じやあ、わけがわからないけど、とりあえず笑おう）↓「わっはっはっ！」

子どもたちにとって先生は、心のよりどころ、いつも変わらぬ救いの神、家を離れての母なる存在、その信頼は計り知れないものがあります。その先生が笑っていることは、わけが分からなくても楽しいことなのです。

子どもたちの素直で健気な心を楽しんでしまいました。ごめんなさい。

その後、わたしののどは順調に回復し、三日後には普通に話せるようになりました。

十一月六日の玉穂幼稚園訪問では、十月二十三日の全蒸声が出なかった状況を覚えていた子がいて、

「りっおせんせい、声はなおりましたか？」と聞いてくれる子がいました。優しい子どもたちですね。

以前、左足首をはく離骨折した時も、幼稚園の子どもたちがわたしの足を心配してくれたことを思い出します。

幼稚園に行つて癒される今日この頃です

【幼稚園指導員 勝又立雄】

